

『三玉挑事抄』注釈 春部（上）

岩 坪 健

本稿は『三玉挑事抄』春部の1番から58番までを掲載する。担当者はすべて本学博士課程在学者で、以下の通りである。なお各項目末尾の（ ）内には、担当者の氏名を示した。

森あかね・大八木宏枝・風岡むつみ・城阪早紀・植田彩郁・吉岡真由美

凡例

一、翻刻は原文のままを原則として、誤字・脱字・濁点・当て字・仮名遣い等も底本の通りにしたが、読解や印刷の便宜を考慮して次の操作を行った。

- 1 句読点を付け、会話文などは「」で括り、底本の旧漢字・異体字・略体は通常の字体に改めた。
- 2 誤写かと思われる箇所には、右側行間に（ママ）と記した。
- 3 和歌の上に、通し番号（1～58）を付けた。

一、「[出典]」の欄には、和歌と注釈本文の典拠を示す。和歌には『新編国歌大観』の歌番号（万葉集は旧番号のみ示

す）を記すが、無い場合は「該当歌なし」と表記し、『三玉和歌集類題』にあれば部立などを示す。注釈本文が『新編日本古典文学全集』（小学館。略称『新編全集』）、または『新釈漢文大系』（明治書院）に収められている場合は、そのページ数も記載する。ただし『新釈漢文大系』の白氏文集で未刊の巻は、続国訳漢文大成『白楽天全詩集』による。

一、「異同」の欄には、翻刻本文との異同を列挙する。ただし、濁点や送り仮名の有無、漢字と仮名の相違、仮名遣の相違は取りあげない。和歌の本文は『新編国歌大観』と、注釈本文は原則として版本と、それぞれ比較する。異同がない場合は「ナシ」と記し、ある場合は『三玉挑事抄』の本文―異文の順に列挙する。複数の作品すべてに異同がない場合は、書名をまとめて列挙して、末尾に「ナシ」と記す。

○源氏物語は、絵入り承応版本（略称『承応』。国文学研究資料館のホームページに公開）と、北村季吟『源氏物語湖月抄』（略称『湖月抄』。『北村季吟古註釈集成』新典社を使用）による。

○伊勢物語・大和物語・枕草子・古今集序・八代集・和漢朗詠集は、『北村季吟古註釈集成』（新典社）による。

○竹取物語は絵入り版本（無刊記版。同志社大学所蔵）による。

○うつほ物語は文化三年（一八〇六年）補刻本、狭衣物語は承応三年（一六五四年）版本により、いずれも三谷栄一『平安朝物語板本叢書』有精堂を使用する。

○漢籍も同志社大学に版本がある場合は、それを用いる。ない場合は『新釈漢文大系』などによる。

一、「訳」の欄には翻刻本文の現代語訳、「考察」の欄には和歌と典故との関係など、「参考」の欄には参考資料などを記す。

一、歌題が同じである和歌が連続する場合、底本では二首めからの歌題は省略しているが、本稿では「訳」に限りすべての歌に題を示した。ただし補足した歌題には（ ）を付けて、底本にはないことを示す。

三玉挑事抄卷上

春部

元日宴

1もろ人の恵隔ぬ道しあれや春立けふの門ひらく声

江次第曰、元日宴會、内弁起座、微音^ニ称、唯經^ニ宣陽殿^ノ壇上^ニ北行、出^レ自^ニ軒廊東第二間^ニ斜行、到^ニ左近陣^ノ南頭^ニ、謝座再拜、開門云云。

同鈔曰、時^三百官、皆在^一門外、至^ニ是^ニ命^ニ開門^一者、令^シ群臣^ハ放入^一也。

〔出典〕雪玉集、五番。江家次第（神道大系）、卷一、正月甲、元日宴會。江家次第鈔（続々群書類従）、第一、正月。

〔異同〕『新編国歌大観』『江家次第』『江家次第鈔』ナシ。

〔訳〕 元日の宴

多くの人に分け隔てなく恩恵を施す道はあるのだなあ。立春の今日、門を開く声（が聞こえる）よ。

江家次第によると、元日の宴會で、内弁は起座して微音で称え、一人で宣陽殿の壇上を経て北行し、軒廊の東の第二間より出て斜行して、左近の陣の南頭に到り、感謝の意を表して二度礼拝して開門する云々。

同鈔によると、この時に百官は皆、門外におり、この時に至ると開門を命じる者は群臣を放入させるのである。

〔考察〕『江家次第』は元日の宴会で、開門に至るまでの手順を記した部分。『江家次第鈔』は一条兼良の注釈書。当歌は、新年に開門を命じる声により群臣が入れる儀式を、多くの人々に恵みをもたらすと見なしたものの。

〔参考〕『江家次第』の異同には、渡辺直彦校注『神道大系 江家次第』（底本は承応二年版。神道大系編纂会、一九九一年）を使用。

（森あかね）

元日

2 けふにあひて吉野の国栖も万代の春のはしめの笛竹の声

日本書紀曰、応神天皇、十九年冬戊戌、幸_ニ吉野ノ宮_ニ。時、国栖人、来朝之。因_テ以_ニ醴酒_ニ献_ニ于天皇_ニ而歌_テ之曰云云。今、国栖人献_ニ土毛_ニ之日、歌訖、即_チ撃_レ口以仰咲。上古ノ之遺_{レル}則也。

延喜、宮内式曰、吉野国栖献_ニ御贄_ニ奏_ニ歌曲_ニ、每_レ節以_ニ十七人_ニ為_レ定。国栖十二人、笛工五人。

江次第曰、元日宴会、国栖奏歌笛、於承明門外、奏之云云。

〔出典〕雪玉集、四番。日本書紀、卷一〇、応神天皇、四八五頁。延喜式（国史大系）、第三一、宮内省。江家次第（神道大系）、卷第一、正月甲、元日宴会。

〔異同〕『新編国歌大観』『江家次第』ナシ。『日本書紀』『十九年冬戊戌—十九年冬十月戊戌朔』『時国栖人—時国櫛人』『国栖人献土毛—国櫛献土毛』『咲上古之遺—咲者蓋上古遺』『延喜式』『歌曲—歌笛』。

〔訳〕 元日

元日の今日、吉野の国栖人も来朝して、限りなく続く世の春の初めに、音楽を演奏することよ。

日本書紀によると、応神天皇、十九年冬の戊戌に、吉野宮に臨幸された。その時、国栖人が来朝した。そして、濃い酒を天皇に献じて歌を詠んだ云々。今、国栖人が土地の産物を献じる日に、歌い終わってただちに口を打ち、上を向いて笑うのは、上古の遺風であろう。

延喜式の宮内省によると、吉野の国栖は御贄を献じ、歌曲を演奏する。節会ごとに十七人と定める。国栖が十二人、笛工が五人。

江家次第によると、元日宴会、国栖は歌笛を奏で、承明門の外でこれを奏でる云々。

〔考察〕当歌は元旦に吉野の国栖人が奏でる音楽を聞き、永き世の春が始まる喜びを詠んだもの。初句の「あひて」に、国栖人に会ってと、今日という日に出会ってを掛ける。国栖は現在も、奈良県吉野町南国栖くずに名を残す。

（森あかね）

3 立かへる春はけふとや万代の月日のはしめ年のはしめに

玉燭宝典曰、正月一日ヲ為三元ノ之日ト、歳ノ之元、時ノ之元、日ノ之元云云。

〔出典〕雪玉集、四二五四番。円機活法、卷三、節序門、元日。

〔異同〕『新編国歌大観』「立かへる―立ちかはる」。『円機活法』ナシ。

〔訳〕 （元日）

年が改まり春は今日と言うのだろうか。限りなく続く世の年の初めであり、月の初めであり、日の初めである元日

において。

玉燭宝典によると、正月一日を三元の日とする。一年の初めであり、一月の初め、一日の初めである云々。

〔考察〕 出典として引用された箇所は『玉燭宝典』（古逸叢書本）に見られないため、『円機活法』を参照した。また、『資治通鑑』（卷一四〇、斉紀六、建武三年三月）の「三元」の注にも、「玉燭宝典曰、正月為_二端月_一、其一日為_二上日_一、亦云_二三元_一、謂_二歳之元・月之元・時之元_一也。」とある。

〔参考〕 杜台卿著『玉燭宝典』は北周の時代に成立した中国年中行事の記録であり、日本にも伝来して現存するが、中国では明・清のころに散逸した。

（大八木宏枝）

立春曉

4 おき出てとなふる星の光まで春に明行空の長閑さ

江次第曰、四方_ニ拝_一、次_ニ皇上_一於_二拝_レスル_ニ属星座_一、端_レ笏_ヲ北面、称_二御属星ノ名字_一斗_ニ遍_一是北云云。庶_人ノ儀_{叩時前庭ニ}

北面_ニ拝_二ス_一属星_一。

〔出典〕 雪玉集、二二六四九番。江家次第（神道大系）、卷一、正月甲、四方_ニ拝_一事。

〔異同〕 『新編国歌大観』ナシ。『江家次第』「端_レ笏_ヲ北面―端_レ笏_ヲ北向」「北面_ニ拝_二ス_一属星―北向_ニ拝_二ス_一属星」。

〔訳〕 立春の夜明け

早朝に起き出して、新年の星の名前を唱えていると、立春の今日、夜が明け年も明けて、星の光までも穏やかな空であることよ。

江家次第によると、四方拝において、次に今上がその年に当る星を拝礼する場所で、笏を正して北を向き、その年の星の名字をお唱えになる。これを七遍くり返すのは、北斗七星にちなむからである云云。庶民の儀式は、午前六時前後に前庭に敷物を敷き、北を向いてその年の星を礼拝する。

〔考察〕当歌の第四句「春に明け行く」の「明け」に、夜が明けると年が明けると掛ける。

〔参考〕『江家次第』の後半部「庶人儀」以下は、他の文献には見られない。一条兼良著『公事根源』に、「昔は殿上の侍臣なども四方拝をばしけるにや。近頃は内裏仙洞撰関大臣家などのほかはさる事もなきなり」とあるように、地下ではされなくなったからであろう。

(吉岡真由美)

立春

5 ^{柏玉}なへて世のちからをいれす波風をよもおさめて春や立らん

古今集序、力をもいれすしてあめつちをうこかし云々。

〔出典〕柏玉集、二八番。古今和歌集、仮名序、一七頁。〔異同〕『新編国歌大観』『古今和歌集』ナシ。

〔訳〕 立春

総じて世間の力ひとつ加えなくても、波風を至るところで落ち着かせて、立春は来るのだろうか。

古今集序によると、力ひとつ入れないで天地の神々の心を動かし云々。

〔考察〕『古今和歌集』仮名序は、和歌が力ひとつ入れないでも天地の神々の心を動かし、目に見えない靈魂を感激させ、男女の仲を親密にし、勇猛な武人の心さえも和やかにすることが出来るなどと和歌の効力を述べた箇所。当歌

は人的な力を一切加えなくても、春が自然に来る様子を詠んだもの。

【参考】仮名序の一節は、「動^二天地^一感^二鬼神^一莫^二近^一於詩^三」〔『毛詩』序〕に拠る。

（植田彩郁）

試書 于時八十歳

6 いさやこら春に心をのはへてん八十にはやもみつの浜松

万葉集、卷一。在^二大唐^一時憶^二本郷^一作歌、山上憶良

去来子等^{イサトトモヘヤジノモトヘ}早日本辺^ニ大伴乃御津乃^{ノミツノ}浜松待恋^{ヌラム}奴良武

【出典】雪玉集、七番。万葉集、卷一、六三番。

【異同】『新編国歌大観』ナシ。『万葉集』「山上憶良―山上臣憶良」「イサトトモ―イサコトモ」。

【訳】 試書 時に八十歳

さあ皆の者よ、新春になったので心の内にあることを述べてしまおう。早くも八十歳になってしまったではないか、三津の浜松よ。

万葉集、卷一。山上憶良が唐にいた時に、本国を思つて作つた歌。

さあ皆の者よ、早く日本へ帰ろう。大伴の三津の浜松も、さぞ待ちわびていよう。

【考察】『万葉集』は、山上憶良が三津（海外使節船が発する難波の港）を偲んで歌つたもの。当歌では「三津」に「満つ」を掛ける。

（城阪早紀）

初春

7 春かすみたつやた、すやふしのねの烟にたれかわきてみるらん

古今序、いまはふしの山もけふりた、すなり云々。

〔出典〕雪玉集、三八番。古今和歌集、仮名序、二四頁。〔異同〕『新編国歌大観』『古今和歌集』ナシ。

〔訳〕 初春

春霞が立っているのだろうか、それとも立っていないのだろうか。富士の峰の煙と春霞を、誰が見分けられるだろうか。

古今集序によると、今は富士の山の煙も絶えることなく云々。

〔考察〕『古今和歌集』仮名序の「煙たたず」の解釈をめぐり、二条家（絶たず）と冷泉家（立たず）で対立している。『雪玉集』の三条西実隆は宗祇から二条派の古今伝授を受けているので、富士の煙は絶えず立っているとすると、当歌は、春霞が富士の煙と見分けられないほど立ちこめている春の景色を詠んだもの。

（風岡むつみ）

子日

8 袖はへてゆくや子日の小松原緑もあけもむらさきの野に

衣服令曰、一位^{コキ}ノ礼服深紫^{コキ}衣、三位以上、浅紫衣、四位^ハ深緋^ハ衣、五位^ハ浅緋衣、六位^ハ深緑衣、七位^ハ浅緑衣。

〔出典〕雪玉集、三六五六番。令義解、卷六、衣服令、諸臣礼服・朝服。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『令義解』「礼服―礼服冠」「深紫衣―深紫衣。牙笏。白袴。條帶。深縹紗褶。錦襪。烏皮舄。」。

〔訳〕 子の日

袖を照り輝かせて、子の日に小松を引きに松原へ行くことよ。緑の衣を着た者も赤の衣を着た者も、そして紫の衣を着た者も、紫草が生えている紫野へ。

衣服令によると、一位の礼服は深い紫の衣、三位以上は浅い紫の衣、四位は深い緋の衣、五位は浅い緋の衣、六位は深い緑の衣、七位は浅い緑の衣。

〔考察〕正月最初の子の日の小松引きは、野に出て小松を引き、若菜を摘み長寿を祝う野遊びで、紫野や北野などへ出かけた。当歌は「小松原」に小松と松原、「紫の野」に衣の紫色のほか地名の紫野と、紫草が生えている野を掛ける。

（大八木宏枝）

若菜

9 祝ひ来し野へのわかなもいまはわれ仏の道につみはやしてん

法華経提婆品。採_ニ薪及菓・苾_ヲ、隨_レ時_ニ恭敬与。

〔出典〕雪玉集、七二二三番。妙法蓮華経、提婆達多品第二一。〔異同〕『新編国歌大観』『妙法蓮華経』ナシ。

〔訳〕 若菜

子の日に長寿を祝つて摘んで来た野辺の若菜も、今や私は仏道において摘み、仏を賛美しよう。

法華經、提婆品。薪・木の実・草の実を採り、時に応じてつつしみ敬って献上した。

〔考察〕『法華經』の一節は、提婆達多という仙人から妙法蓮華經を得るため、釈迦が仙人に仕えて、木の実などを採った苦勞話。当歌は、今までは若菜を摘み長寿を願っていたが、今は仏に帰依する心を詠んだもの。

（大八木宏枝）

毎家有春

10時しあれば花鶯の数ならぬ垣根のうちも雪まみゆらん

源氏物語。初子卷云、年立かへるあしたの空のけしき、なこりなく、くもらぬ空のうららかさには数ならぬ垣根のうちたに雪まの草わかやかに云々。

〔出典〕雪玉集、六三九番。源氏物語、初音卷、一四三頁。

〔異同〕『新編国歌大観』「雪まみゆらん―雪まあるらん^{みゆ}」。『承応』『湖月抄』ナシ。

〔訳〕 家ごとに春あり

時期がきたら花が咲き、鶯が来るように、庶民の垣根の内側にも雪の消え間が見えるだろう。

源氏物語の初音の巻によると、年の改まった元日の朝の空のけしきが、一片の雲もないうららかさなので、これといった身分のない者の垣根の内でさえ、雪の消え間からのぞく初草が若々しく云々。

〔考察〕『源氏物語』は初音の巻頭で、六条院の造営後に初めて迎えた新年、その庭の景色を描写した場面。

（風岡むつみ）

霞

11 釣にともすよるの火よりも明石かた岩こす波にしく霞かな

白氏文集。霞ノ光^ハ曙^{ケテ}後^ア殷^{カシ}於火^ニ。^一草ノ色^ハ晴^レ来^テ嫩^{キコト}似^レタリ烟^ニ。

〔出典〕雪玉集、四八番。白氏文集（白楽天全詩集4）二二七頁、早春憶蘇州寄夢得。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『白氏文集』「草色―水色」。

〔訳〕霞

夜、釣りをするときに灯す火よりも明るい、明石渚の岩を越すほど高い波一面に広がる霞であるなあ。

白氏文集。朝焼けの光は夜が明けるにつれて雲に映じて火よりも赤い。草の色も雨上がりの中でぼうっとしていて一面にもやがかかっているようだ。

〔考察〕『白氏文集』の一節は、早春の時節に蘇州を思い、蘇州刺史の劉禹錫に寄せたもの。『和漢朗詠集』（上・春・霞・七五番）に所収。

（風岡むつみ）

朝鷺

12 かすかなる谷にならひて朝日さす木末やいかにうつる鷺

〔出典〕雪玉集、一〇九番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕朝の鷺

ひっそりとした谷にすることに慣れてしまった鷺は、朝日がさす梢にどのようにして移るのだろうか。

〔考察〕「谷の鷺」は、中国の唐代に幽谷を出る鷺が早春詩の題材とされていたことを受容したものである。典拠は13

番歌に同じ。

（城阪早紀）

鶯為友

13 末遠くたかきにうつる道しらは宿にちきらん谷のうくひす

詩経。伐^レ木^{ルコト}丁々^ヲ鳥鳴^{クコト}嚶々^々。出自^レ幽谷^ニ遷^ニ于喬木^ニ。

〔出典〕雪玉集、二六五二番。詩経（中）、小雅、伐木、一八二頁。〔異同〕『新編国歌大観』『詩経』ナシ。

〔訳〕 鶯を友とする

遙か彼方の高木に移る谷の鶯よ。出世する方法を知っているならば、私の家に来て教えてほしい。

詩経。木を伐る音はこんこんと、鳥鳴く声はおうおうと。深き谷間より出て、高き木に移る。

〔考察〕「丁々」は木を切る音を模したもので、「嚶々」は鶯が互いに鳴きあう声の擬声語である。鶯は立春の日に幽谷から喬木に遷り、人に春の訪れを告げる鳥として和歌に詠まれる。

〔参考〕菅原道真の歌に「谷深み春の光のおそければ雪につつめる鶯の声」（新古今集、雑上、一四四〇番）がある。「谷の鶯」は不遇や籠居の隠喩とされ、谷を出る鶯は出世や昇進を意味する。

（城阪早紀）

旧巢鶯

14 花^碧になくならひわすれぬ鶯は古すなからや咲をまつらん

古今序、花になく鶯、水にすむかはつの声をきけは云々。

〔出典〕該当歌なし。古今和歌集、仮名序、一七頁。〔異同〕『古今和歌集』ナシ。

〔訳〕 古巢の鶯

花の咲くなかで鳴くという慣わしを忘れない鶯は、古巢にいなながら花が咲くのを待つのだろうか。

古今和歌集の仮名序に、花間にさえずる鶯、清流に住む河鹿蛙かしかの声を聞けば云々。

〔考察〕『三玉和歌集類題』に「旧巢鶯」の部立はあるが、当歌は収録されていない。『古今和歌集』仮名序は、鶯や蛙の声を聞けば誰でも歌を詠むとして、和歌の本質について述べた箇所。

（城阪早紀）

鶯知万春

15 柏玉よろつ代の春待出てかしこきも谷にのこらぬうくひすの声

和漢朗詠集。鶯未^レ出^レ遣^レ賢在^レ谷^ニ。

〔出典〕 柏玉集、一一五番。和漢朗詠集、上、春、鶯、六三番。〔異同〕『新編国歌大観』『和漢朗詠集』ナシ。

〔訳〕 鶯、永遠の春を知る

ずっと春を待ち受けて、ようやく春に出会った鶯が谷に残っていないように、永久に続く平和な世を待ち受けて出会った賢者は谷に残らず朝廷に仕えているよ。

和漢朗詠集。鶯が谷に籠ってひっそりとしているのは、賢者が民間にいてまだ召し出されないのに似ている。

〔考察〕『和漢朗詠集』の句は、政治が正しければ朝廷に出て仕え、正しくなければ山野に隠れ退く「遺賢」（民間に

埋もれている賢者の意」を鶯に例えたもので、当歌もそれを踏まえる。

（植田彩郁）

春雪

16 あつめきてなれしをしたふ身にしあらは春をや枝の雪に恨む

蒙求。孫氏世録曰、康家貧^{シテ}無^レ油、映^{レシテ}雪^ニ読^{レム}書^ヲ。少^{ニシテ}々清介也。交遊不^レ雜。後至^ニ御史大夫^ニ。

乙女巻云、窓の螢をむつひ、枝の雪をならしたまふ心さしのすくれたるさまを云々。

〔出典〕雪玉集、一二六五一番。蒙求、孫康映雪、四六〇頁。源氏物語、少女巻、二六頁。

〔異同〕『新編国歌大観』『承応』『湖月抄』ナシ。『蒙求』『映雪―常映雪』『少々―少小』。

〔訳〕 春の雪

雪を集めて来て冬の間慣れ親しんだのを懐かしく思う身の上ならば、枝の雪を溶かす春を恨むだろうか。

蒙求。孫氏世録によると、晋の孫康は家が貧しいため燈油が買えず、雪に照らして書物を読んだ。幼少より心清く節操堅かった。また、交わり遊ぶにも志を同じくしない者とは交際しなかった。後、官に仕えて御史大夫にまで進んだ。

乙女巻によると、窓の螢を友とし、枝の雪に親しむといった刻苦勉勵の決意がいかに殊勝であるかを云々。

〔考察〕『蒙求』の「孫康映雪」「車胤聚螢」から生まれた「螢雪の功」という故事を、乙女の巻の一節「窓の螢をむつひ、枝の雪をならしたまふ」も踏まえているが、「窓の螢」「枝の雪」の本文を含む漢籍は見当たらない。

（植田彩郁）

垣根残雪

17 山さとはなへての春の数ならぬ垣ねしらる、雪のかよひち

初子巻の詞。まへにしるし侍り。

〔出典〕雪玉集、一五五番。源氏物語、初音巻、一四三頁。〔異同〕『新編国歌大観』『承応』『湖月抄』ナシ。

〔訳〕 垣根に残る雪

山里一面にも春が来て、雪を踏みしめて通った粗末な家の（雪に埋もれていた）垣根も現われて、ありが分かることだ。

初音の巻の文章。前述しております。（10 番歌、参照）

〔考察〕初音の巻は、元旦に低い身分の者の家の垣根の内でさえ、雪の消えた間から草が色づいている景色を描写した場面。当歌はそれを踏まえて、都から離れた山里にも春が来て、雪に埋もれていた垣根も姿を現わしたと詠む。

（吉岡真由美）

夜梅

18 あくかる、梅か香なから笛の音はこゝろあるへき朧月夜を

三昧詩。戒昱、聞^レ笛^ヲ詩^ニ、平明独^リ惆悵。落^ス尽^メ一庭^ノ梅。

朗詠集。落^レ梅^曲旧^リ唇吹^レ雪^ヲ。註^ニ引^ニ語林^一曰、夔吹^レ簫^ヲ而作^ル数曲^一。有^ニ折柳落梅^ノ曲等^一云云。

〔出典〕雪玉集、一八九番。三昧詩、聞笛。和漢朗詠集、下、管弦、四六七番。和漢朗詠集私注（和漢朗詠集古注釈集成 1）。

〔異同〕『新編国歌大観』『三昧詩』『和漢朗詠集』『和漢朗詠集私注』ナシ。

〔訳〕 夜の梅

臘月夜に、心ひかれる梅の香りを漂わせたまま、（梅花を散らさないように）笛の音色は気をつけておくれ。

三昧詩。戒昱の「笛を聞く」詩に、夜明け方に独り嘆き悲しむ。庭一面に梅の花が散ってしまったのを見る
と。

和漢朗詠集。「落梅花」という笛の古曲を吹いていると、唇のまわりには雪のように梅花が舞う。註に『語林』を引用して言うには、變が簫を吹いて曲をいくつか作った。折柳落梅の曲などがその中にあった云云。

〔考察〕『和漢朗詠集』では、梅の花が散る様子を雪に例えている。『三昧詩』は漢代の横吹曲「梅花落」にちなむ。
当歌はそれらを踏まえ、梅花を散らさないように笛を吹いてほしい、と願ったもの。

（吉岡真由美）

窓梅

19 風もまたおもへや深き窓のうち人にしられな梅の匂ひを

長恨歌。楊家^ニ有^レ女初^テ長成^{レリ}、養^{レテ}在^ニ深窓^ニ人未^レタ識^ス。

〔出典〕雪玉集、二二四番。白氏文集、卷一二、八〇九頁。

〔異同〕『新編国歌大観』『しられな―しられぬ』。『白氏文集』（金沢文庫本）ナシ。

〔訳〕 深窓の梅

風もまた思いやって欲しいものよ、深窓には人に知られていない梅の香りがあることを。

長恨歌。楊家には妙齡となつたばかりの娘がいて、深窓に養われた彼女の存在は、世の人々にまだ知られていなかった。

〔考察〕引用箇所は「長恨歌」の第三・四句にあたり、天性の麗しさを持った楊貴妃が深窓に養われていたことを歌う。当歌は梅を深窓の佳人に見立てて、花を散らす風に呼びかけたもの。

〔参考〕那波本『白氏文集』と『古文真宝前集』巻八（五八三頁）では、「深窓」ではなく「深閨」の異同が見られる。

野梅

（大八木宏枝）

20 なをのこる雪もそれかと遠き野の夕日かくれに咲る梅か香

若菜巻上云、なをのこれる雪と、忍ひやかにくちすさみたまひつ、。

白氏文集。子城ノ陰、処猶殘^{レス}雪ヲ。

〔出典〕雪玉集、六七七五番。源氏物語、若菜上巻、六九頁。白氏文集（白樂天全詩集2）、卷一六、庾樓眺望。

〔異同〕『新編国歌大観』『承応』『湖月抄』『白氏文集』ナシ。

〔訳〕 野の梅

遠くの野にまだ残っている雪も白梅かと思うことよ。夕日が当たらない陰に咲いている梅の香りを感じると。

若菜巻上によると、「なお残れる雪」と小声でお口ずさみになりながら。

白氏文集。子城の陰には、なお雪が残る。

〔考察〕「庾楼曉望」詩の「子城」とは、本城の外に張り出して築いた出城^{でしろ}。

（大八木宏枝）

梅有佳色

21 咲からに色も匂ひもこる花の名に高かれや九重の春

順、和名鈔曰、凝華舎在_二飛香舎北_一牟倍豆保。

〔出典〕雪玉集、一三五番。倭名類聚抄（二〇巻本）、巻一〇、居所部第一三。

〔異同〕『新編国歌大観』『倭名類聚鈔』ナシ。

〔訳〕 梅に佳色あり

咲くとすぐに色つやも香りも凝る花、すなわち凝華舎の名前のように、名高くなれよ、春の都で。

源順の『倭名類聚鈔』によると、凝華舎は飛香舎の北にあり、梅壺という。

〔考察〕当歌は、梅壺の別名である凝華舎の「凝華」を凝る華と訓読みして詠まれた。凝華舎は内裏の後宮五舎の一つで、中庭（壺）に梅の木が植えられていたことから梅壺とも呼ばれた。

（風岡むつみ）

里梅

22 言の葉の花そむかしの春に猶にほふ初瀬の里の梅か香

古今集云、初瀬にまふつることに、やとりける人の家に、久しくやとらて、程へてのちにいたれりければ、かの家のあるし、「かくさたかになん、やとりは有」といひ出して侍りければ、そこにたてりける梅の花を折て

よめる。貫之、人はいさ―。

〔出典〕雪玉集、二二二番。古今和歌集、春上、四二番。〔異同〕『新編国歌大観』『古今和歌集』ナシ。

〔訳〕 里の梅

紀貫之が詠んだ梅花の名歌は昔のものになってしまったが、初瀬の里の梅の香りは、毎年春になると今なお香ることだなあ。

古今和歌集によると、長谷寺に参詣するたびに宿にとつていた家があったが、長らく泊まらなかった。しばらくしてまた訪れたところ、その家の主人が、「お宿はこのようにちゃんとありますよ」と言いかけてしたので、そこに植えてあった梅の花を折って詠んだ歌。紀貫之。人の心という物は―。

〔考察〕当歌は貫之の「人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香ににほひける」の歌を踏まえて、長谷寺のある初瀬の梅を詠んだもの。

（風岡むつみ）

夜梅

23 あはらなる板間そひ行月影にこそはと忍ふむめのした風

いせ物かたり云、又の年のむ月に、梅の花さかりに、こそをこひていき、立てみゐてみ見れと、こそに似るへくもあらず。打なきて、あはらなる板しきに、月のかたふくまでふせりて、こそをおもひ出てよめる云々。

〔出典〕雪玉集、三九六二番。伊勢物語、四段。〔異同〕『新編国歌大観』『伊勢物語』ナシ。

〔訳〕 夜の梅

がらんとした板間に沿って移り行く月の光を見て、去年のことを思い出して耐え忍んでいると、梅の木の下から風が吹いてくるよ。

伊勢物語によると、翌年の正月がめぐってきて、梅の花が盛りと咲いている。そうした時に、男は去年を恋しく思い、(五条の西の対に行つて)、立って見たり座って見たりなどして、辺りを見まわしたが、去年と眺めた感じとはまるでちがう。男はさめざめと泣いて、住む人もなく、(几張や敷物などを取り払つて) がらんとした板敷きに、月が西の方に傾くまでじつと臥せて、わいてくる去年の思い出を歌にした云々。

〔考察〕『伊勢物語』四段は、男が想い慕っていた女人が、姿を消してしまふ。男は、かつて女が住んでいた西の対に行き、去年とは違ふ屋敷の寂し気な様子に涙し、「月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」の名歌を詠むという内容である。当歌の「忍ぶ」(耐える)に「偲ぶ」(恋い慕ふ)を掛ける。

(城阪早紀)

岸柳

24きし陰に春ゆく水はあるよりもなを青柳のなひく川風

荀子曰、学不_レ可_レ己。青_{キコト}出_テ於_ニ藍_{ヨリ}而青_ニ於_ニ藍_{ヨリ}。

〔出典〕雪玉集、二五四番。荀子、卷一、勸学篇第一、一五頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『荀子』「学不_レ可_レ己―学不_レ可_ニ以_ニ己」〔出―取之〕。

〔訳〕 岸の柳

春の岸辺の陰を流れてゆく水は、藍よりもいつそう青く、青々とした柳が川風になびいているよ。

荀子によると、学問は途中で止めても構わないようなものではない。青色の染料は藍の草から取るが、原料の藍よりもいつそう青い。

〔考察〕『荀子』の引用部は、弟子が師より優ることの例えに用いられる。当歌の「青柳」に「青」を掛ける。

（城阪早紀）

門柳

25 浅みとり柳の髪も打はへて老せぬ門の春やしるらん
柏玉

朗詠集、不老門前日月遅。

〔出典〕 柏玉集、一八六番。和漢朗詠集、下、祝、七七四番。

〔異同〕『新編国歌大観』「打はへて―折りそへて」「老せぬ―老いぬる」。『和漢朗詠集』ナシ。

〔訳〕 門の柳

浅緑色の柳の葉はずっとどこまでも伸びていき、いつまでも老いを迎えることのない門の春を知っているだろうか。

和漢朗詠集。不老門のあたりでも、時はゆっくり流れて、天子は老いを迎えることはないのだ。

〔考察〕「不老門」とは、洛陽にあった漢代の宮門の名。当歌は『和漢朗詠集』の天子の治世が平和で万年も続くことを祝った句を受け、伸びていく柳になぞらえて永久に続く春を詠んだもの。

（植田彩郁）

古柳

26 ふうにけりいくその人のわかれちをあはれとかみし青柳の陰

劉商詩。幾回^カ離別^テ折^テ欲^{レス}尽^{ント}、一夜東風吹^テ又長。

〔出典〕雪玉集、六七七七番。『対床夜語』（四庫全書）卷三。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『対床夜語』『劉商詩』『劉商柳詩』『東風―春風』。

〔訳〕 古柳

柳の木は古びてしまったなあ。何度も青柳の小蔭で人と別れたことを、柳はしみじみと見たのだろうか。

劉商の詩。何度も別れを繰り返して、そのたびに柳の枝を折り、はなむけとしたので、柳の枝は無くなりそう
だ。一晩中、東から春風が吹いて、それが長く感じられる。

〔考察〕『対床夜語』は宋の范晞文の撰、漢から宋までの詩を論じたもの。劉商は中唐の詩人。漢代、長安の都を旅立
つ人を見送るとき、柳の枝を折り餞別にした故事を踏まえる。

（植田彩郁）

海上暮霞

27 波間^{碧玉}よりよる舟近し雲かへる山はそれともわかぬかすみに

文選、卷二十二。謝靈運、遊^ニ南亭^ニ云、雲帰^テ日西^ニ馳^ス。

古文後集。醉翁亭記。日出^テ而林霏開^ケ、雲帰^テ而岩穴暝^シ。

〔出典〕該当歌なし。文選、遊南亭、一七二頁。古文真宝後集、醉翁亭記、一六五頁。

〔異同〕『文選』ナシ。『古文真宝後集』『岩穴―巖穴』。

〔訳〕 海上の暮霞

波間から帰って来る舟は近い（が霞に隠れて見えない）。夕暮れになると雲が帰る山は、どことも分らないほど霞んでいる。

文選、卷二十二。謝靈運の「南亭に遊ぶ」によると、雲は山に帰り日は西に馳せ隠れようとしている。

古文真宝後集。醉翁亭記。朝には日が出て林のもやが晴れて開け、暮には雲が山に帰って岩穴が暗くなる。

〔考察〕『三玉和歌集類題』に「海上暮霞」の部立はない。「遊南亭」は晩春の夕暮れ時、雨が止んだ後に広がるすがすがしい景色を、「醉翁亭記」は山間の朝暮や四季の景の素晴らしさを詠んでいる。

（吉岡真由美）

帰雁

28 ゆく雁のおもひはさそな同じ枝も南に巣くふ鳥をみるにも

文選、古詩。胡馬依_ニ北風_ニ越鳥巢_フ南枝_ニ。

〔出典〕雪玉集、三四四番。文選、雜詩、上、五五四頁。〔異同〕『新編国歌大観』『文選』ナシ。

〔訳〕 帰雁

春になると北へ帰る雁は、きつと故郷が恋しいのだろう。同じ木の枝でも、南の枝を求めて巣を作る鳥を見るにつけても。

文選、古詩。胡の馬は北風に身をよせていななき、越の鳥は南の枝を求めて巣を作る。

〔考察〕出典の「文選古詩」は、遠行の夫を思う妻の詩とされている。「帰雁」とは、春になると北国へ帰る雁のこと

と。

(吉岡真由美)

29 ^{碧玉}さく花の春をそむけて行雁はいかに色なき心なるらん

白氏詩句。背^レ春^ヲ有^ニ去^ル雁^一。

〔出典〕碧玉集、一三七番。白氏文集（白樂天全詩集2）、卷一、初到^ニ忠州^一登^ニ東樓^一寄^ニ万州楊八使君^一。

〔異同〕『新編国歌大観』『白氏文集』ナシ。

〔訳〕（帰雁）

花の咲く春に背いて去る雁は、どれほど情趣のない心を持っているのであろうか。

白氏詩句。春に背いて去る雁がいる。

〔考察〕出典の詩句は、忠州の東樓に登ると憂いを増すばかりで、春に背いて去る雁はあっても、川を上って来る船はない、と詠まれた部分。当歌は来る春と行く雁を対比して、それは雁の「色なき心」によると詠む。

(大八木宏枝)

春雨

30 わつかなるかはらの色もさひしきはかすみをおつる夕くれの雨

朗詠集。都^ノ府^ノ楼^ハ纔^ニ看^ニ瓦^ノ色^ヲ。

〔出典〕雪玉集、三三二番。和漢朗詠集、下、閑居、六二〇番。菅家後集、四七八番、不出門。

〔異同〕『新編国歌大観』『和漢朗詠集』ナシ。

〔訳〕 春雨

わずかに望める瓦の色もさみしく見え、夕暮れになると霞の中を落ちるように雨が降ることだ。

和漢朗詠集。大宰府政庁の楼門は、わずかに瓦の色を遠く眺めやるだけ（で私は閉じこもったまま）だ。

〔考察〕 出典の詩句は、菅原道真が大宰府に左遷され謹慎蟄居のさまを歌ったもの。

〔参考〕 「霞をおつ」の例は他に見当たらないが、「霞におつ」ならば寂蓮法師の名歌「暮れて行く春のみなどは知らねども霞におつる宇治の柴舟」（新古今集、巻二、春下、一六九番）がある。また、「霞をくおつ」であれば、「野べにしく草のみどりの末遠み霞を分けてひばりおつなり」（新拾遺集、巻一八、雑上、一五四二番、花園院）がある。

（大八木宏枝）

庭春雨

31 まさこしく深さ浅さも庭にみて草あをみ行春の雨かな

朗詠集。鑽^ル沙^ハ草^ハ口^ハ三分計。

〔出典〕 雪玉集、五七五二番。和漢朗詠集、上、春、霞、七六番。菅家文章、四四五番、同賦春浅帯輕寒応製。

〔異同〕 『新編国歌大観』「みて―見えて」。『和漢朗詠集』ナシ。

〔訳〕 庭の春雨

庭に敷き詰めた砂の深さや浅さも目に見えて、春雨が降り、草が青くなっていくことよ。

和漢朗詠集。砂を突き破るようにして芽を出した草はまだ三分（一センチ弱）ほどである。

〔考察〕当歌は、砂の浅い所は砂を突き破りやすいので草の丈が長く、逆に砂の深い所は草の丈が短い、という不揃いなさまを詠んだもの。まだらなさまを詠んだ歌としては、宮内卿の名歌「薄く濃き野への緑の若草に跡まで見ゆる雪のむら消え」（新古今集、卷一、春上、七六番）が挙げられる。

（大八木宏枝）

行路春草

32時^{柏玉}しあれは青きをふみし草のうへもはては行きの道によくらん

山谷詩。白^レ白^レ紅^レ紅^レ相間開、三^三三^五五踏^青来、戯^ニ随^ニ胡蝶^ニ不^レ知^遠、驚^ニ見^{行人}一笑^却回^ル。

〔出典〕三玉和歌集類題、行路春草。山谷外集、卷一四、行邁雜編六首。

〔異同〕『三玉和歌集類題』「時しあれは―時しあれと」「青き―青」「行き―往来」。『山谷外集』ナシ。

〔訳〕 行路の春草

春になると草が青々となり、その上を踏んでいたが、しまいには（道の真ん中に茂って）人が避けるほどになるのだろう。

黄山谷の詩。白い花と紅い花とがまぜこぜに咲いている中を、三人五人が青々とした草を踏み歩き、ふざけて蝶々についていき、思いがけず遠くへ来て、道行く人を見て驚いて笑って帰った。

〔考察〕『山谷外集』は北宋の詩人、黄庭堅（山谷道人と号す）の詩集。

〔参考〕引用された詩は、元の時代に列行された選詩集『聯珠詩格』に採録された。それを江戸時代後期の漢詩人である柏木如亭が、当時の話し言葉を使って訳したのが、以下に引く『訳注聯珠詩格』（岩波書店、二〇〇八年）で

ある。

しろいな あかいはな まぜこぜ
白々と紅々とが相間に開てゐるなかを 三々五々づつ踏青が来る 戯に胡蝶に随て不知ず遠くへきて 行人を
びつくり わらってかへつた
見て驚して笑却廻

（風岡むつみ）

春駒

33 時しありてかへしにけりな春の駒花の山辺にいはふ声々

書経。武成曰、乃偃^レ武修^レ文^ヲ帰^ニ馬^ヲ干^ニ華^ノ山^ノ之^ニ陽^ニ。

〔出典〕雪玉集、四〇六六番。書経（下）、武成、四七一頁。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『書経』「干——于」。

〔訳〕 春の駒

時期がきたので馬を帰してしまったのだなあ。春の花が咲く山辺で、馬がいなく声が聞こえる。

書経。武成によると、武器はしまつて文徳を布き、馬を華山の南に送り返す。

〔考察〕『書経』武成の一節は、外征から帰ってきた武王がその成功を知らせるために武器を納めさせ、馬を華山の南に送り、牛を桃林の野に放つて、天下にもう用がないことを示したという箇所。

（風岡むつみ）

34 はなちかふ野へも夕日の春の駒空に過行影をしそおもふ

莊子、盗跖篇。忽然^{トシテ}無^レ異^ニ騏驎^ノ之^ヲ馳^テ過^レ隙^ヲ也。

〔出典〕雪玉集、三二六六番。莊子（下）、雜編、盗跖第二九、七四九頁。

〔異同〕『新編国歌大観』「過行―ひま行」。『莊子』「忽然―忽然」。

〔訳〕（春の駒）

春になり、馬を放し飼いしている野原にも夕日が射し込み、駿馬のように空を通り過ぎる日の光を思うことだ。

莊子、盗跖篇。あたかも駿馬が戸のすき間を走り過ぎるようなもので、ほんの一瞬の間のことだからである。

〔考察〕『莊子』盗跖編の一節は、天地に比べて人間の命は儂いものである、と盗跖が孔子に語った箇所。

（風岡むつみ）

柳桜交枝

35 ^柏みたれあふみとりも花のかたはらの太山木ならぬ青柳の糸

紅葉賀巻云、立ならひては、花のかたはらの太山木なり。

〔出典〕柏玉集、三二七番。源氏物語、紅葉賀巻、三二一頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『承応』『湖月抄』『太山木―深山木』。

〔訳〕柳と桜が枝を交える

桜と枝を交わしている緑も、桜の傍らの山奥の木ではなくて、青柳のしだれた枝であるなあ。

紅葉賀の巻によると、（頭中將でさえも源氏の君と）立ち並んでは、やはり花の傍らの深山木^{みやまぎ}といたところである。

〔考察〕『源氏物語』は、源氏が頭中將と立ち並び青海波を舞う場面。「深山木」は深山に生えている木、「青柳の糸」は青柳のしだれた枝を糸に見立てていう語。50番歌、参照。

尋花

36しるへするまほろしもかな白雲のゆくゑをたとる花のありかに

長恨歌序云、玄宗却^ニ復^テ宮闕^ニ思悼之至令^{シテ}方士^ヲ求^ニ致其魂魄^ヲ云云。

桐つほ御門
尋ねゆくまほろしもかなつてにても玉のありかをそこしるへく

〔出典〕雪玉集、三八四番。長恨歌并序。源氏物語、桐壺卷、三五頁。

〔異同〕『新編国歌大観』『長恨歌并序』（早稲田大学図書館、古典籍データベース）『承応』『湖月抄』ナシ。

〔訳〕花を尋ねる

白雲の流れていく先を尋ねてさがすと、白雲のように見える山桜にたどり着くが、その場所を教えてくれる幻術士がいればなあ。

長恨歌の序によると、玄宗は再び宮殿に戻り、亡き楊貴妃のことを恋慕するあまり、彼女の魂を方士に求めさ

せた云云。

桐壺帝の歌
亡き更衣の魂を捜しにゆく幻術士がいてほしいものよ。そうすれば、人伝にでもその魂のありかをどこそこと

知ることができるだろうに。

〔考察〕『源氏物語』の和歌は、更衣が亡くなったことによる帝の深い悲嘆を『長恨歌』の悲恋になぞらえたもの。当

歌は、魂のありかではなく、花のありかを幻術士に求めたもの。桜を白雲に見立てることについては、本集の43番歌を参照。

〔参考〕『長恨歌序』は中国に伝来しないため、日本人の作かと見なされていたが（近藤春雄氏『説林』一九五九年六月号）、陳狷氏（『域外漢籍研究集刊』7、二〇一一年）は白楽天の真作と論じた。

（城阪早紀）

37只にやは見すはかへらん桜花かめのうへなる山にさくとも

列子、湯問篇。渤海ノ之東、不知幾億万里^一有^二大壑^三焉。實^二惟無^レ底之谷^{ナリ}。其下無^レ底。名^テ曰^二歸墟^一。八^一絃九^一野ノ之水、天漢ノ之流、莫^レ不^レ注^レ之、而無^レ増無^レ減焉。其中有^二五山^一、一曰、岱輿。二曰、員嶠。三曰、方壺。四曰、瀛洲。五曰、蓬萊。其^二山高下周旋三万里^一、其^二頂平処九千里^一。山ノ之中間、相去^ル七万里、以^レ爲^レ隣居焉。其^二上台觀皆金玉^一、其^二上禽獸皆純縞^一。珠玕ノ之樹皆叢生、華實皆有^二滋味^一、食^レ之皆不^レ老不死。所^レ居之人、皆仙聖之種、一日一夕、飛相往來者、不^レ可^レ數焉。而五山之根、無^レ所^二連著^一、常隨^二潮波^一、上^レ下往還^{シテ}、不^レ得^レ暫^ク峙^ツ焉。仙聖毒^{シテ}之、訴^フ之於帝^一。帝恐^下流^ニ於西^一極^ニ、失^中群^上聖ノ之居^ヲ、乃命^二禺疆^一、使^上臣鼈十五^一、拳^レ首而戴^上之^ヲ、迭^ニ爲^二三番^一六万歳^一一交^ル焉云々。

〔出典〕雪玉集、四六八一番。列子、湯問第五、二二五頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『列子』「八絃―八絃」「有五山―有五山焉」「皆叢生―皆叢生」「不得暫―不得暫」「臣鼈―巨鼈」。

〔訳〕（花を尋ねる）

どうして桜の花を見ないで空しく帰れるだろうか。たとえ亀の頭上にある五山に咲いていても。

列子、湯問篇。渤海の東の方、幾億万里と言っても計り知れない所に、大きな谷がある。この谷は、本当に底なしの谷である。その奥は限りなく深い。名は帰墟と言う。天上界のすべての水、天の川の流れなど、全部この谷に注ぎ込んでゐるのに、水量は一向に増えもせず減りもしない。谷の中に五つの山があつて、一つ目は岱輿と言う。二つ目は員嶠と言う。三つ目は方壺と言う。四つ目は瀛洲と言う。五つ目は蓬萊と言う。これらの山々は、周圍が三万里もあり、頂上の平地は九千里もある。山と山の間は、七万里も離れているが、隣り合わせとされている。頂上にある建物は皆、金銀宝石の類でできており、そこに生息している鳥獸は皆、真っ白である。また、玉の木の群が生えており、果実はどれも美味しくて、それを食べると、食べた人は皆、ふけこみもせず、死にもしない。そこに住んでいる人は皆、仙人の類で、昼となく夜となく山から山へと飛行して、往き来する者は数えきれない。ところが、五つの山の根元はつながっておらず、常に波のまにまに上がった下がつたりして漂い巡り、すこしも静止していなかった。仙人たちはこれに困って、このことを天帝に訴えた。すると天帝は、五山が宇宙の四方の果ての方へ流れて行ってしまつて、仙人たちの住みかなくなつては大変だと心配して、さつそく禺疆という北極を司る神に言いつけ、大きな亀十五匹に、頭をもたげて五山を頭上に載せさせ、入れ代つて三交代することとし、六万年で一回りするようにさせた云云。

〔考察〕当歌は、『列子』湯問篇で語られる亀の頭上にある五山のような、到底たどり着けない場所に咲いている桜であつても、花を見ないで帰るのは惜しいと詠んだもの。

38 夜をこめて花にと急く山路かな馬にくらをき車よそひて

古文後集。送^三李^一愿^二婦^三盤^四谷^五序、韓退之。膏^三吾^二車^一兮秣^三吾^二馬^一。

〔出典〕雪玉集、三八七番。古文真宝後集、送李愿婦盤谷序、一二四頁。

〔異同〕『新編国歌大観』『古文真宝後集』ナシ。

〔訳〕 遙かに花を尋ねる

まだ夜が明けないうちに、桜の花を見に行こうと山道を急ぐことよ。馬に鞍を置き車を準備して。

古文真宝後集。李愿の盤谷に帰るを送るの序、韓退之。わが車に油をさし、わが馬にまぐさをくれ。

〔考察〕 出典の詩歌は、盤谷に帰る李愿の志に感心した韓退之が、安楽の地へ急ぎ生涯、隠者として暮らしたいという願いを詠んだもの。

〔参考〕『雪玉集』の歌肩に「続撰吟大永三三廿五」と記されている。

(吉岡真由美)

海辺花

39 磯山の花のさかりは心なきあまもさかてや打詠むらん

いせ物語云、かの男はあまのさかてを打てなん、のろひをるなる云々。

〔出典〕雪玉集、七七二番。伊勢物語、九六段。〔異同〕『新編国歌大観』『伊勢物語拾穂抄』ナシ。

〔訳〕 海辺の花

磯べの山桜が盛りになると、風情を解さない海人も（天の逆手を打つではないが）、物思いにふけて桜をぼんや

りと眺めているだろうか。

伊勢物語によると、例の男は天の逆手を打って、呪っているとかいふことだ云々。

〔考察〕『伊勢物語』九六段は、ある男が一人の女に熱心に言い寄り、女も情を寄せるようになるが、男と一緒にすることを心配した女の兄が女をどこかへ連れて行き、それ以来、女の話はわからなくなった。それを悔やんだ男は、天の逆手を打って呪っているという噂が立った、という内容である。「天の逆手」は『古事記』上巻、大国主神の子である八重言代主神が国譲りに賛同する旨を伝えた際にも登場する。詳細は不明であるが、呪術的な動作であったらしい。当歌は「あま」に「海人」と「天」、「打」に「天の逆手（う）を」打ち」と「打ち（詠む）を掛ける。

（吉岡真由美）

花留人

40 ^{柏玉}いかにはん人もと、めぬかへるさの花にをれつ、一夜明さん

こてふの巻云、「けに春の色はえおとさせ給ましかりけり」と、花にをれつ、聞えあへり。

〔出典〕柏玉集、三〇七番。源氏物語、胡蝶巻、一七二頁。〔異同〕『新編国歌大観』『承応』『湖月抄』ナシ。

〔訳〕 花が人を留める

どう言えばよいだろうか。誰も引き留めてくれず帰る途中、桜の美しさに心ひかれて、ここで一夜を明かそう。

胡蝶の巻によると、「なるほどあのおみことな春景色は、とてもお負かしになれるものではございませんでした」と、一同は花に魂を奪われて申しあげる。

〔考察〕胡蝶の巻は、秋の御殿に住む中宮に仕える女房たちを、源氏が春の御殿に招いて船樂を催し、夜も徹して遊

宴が行われ、公卿や親王たちも参加した。その翌日、招待された女房たちが中宮に、昨夜の催しを報告した箇所である。当歌はそれを踏まえ、花の美しさは帰ろうとする人をも引き止めてしまうと歌ったもの。

(吉岡真由美)

野花留人

41 たつことやいと、交野の花ならん絶てさくらの外にさかすは

いせ物語云、いま狩する交野のなきさの家、其院のさくらことに面白し。その木のもとにおりゐて、枝を折て、かさしにさして、かみ中しも皆歌よみけり。うまのかみなりける人のよめる。世の中に絶えて―。

〔出典〕雪玉集、三八六六番。伊勢物語、八二段。〔異同〕『新編国歌大観』『伊勢物語拾穂抄』ナシ。

〔訳〕 野の花が人を留める

ますます交野の花のもとを立ち去りがたくなるだろうよ。もしもまったく桜が、交野以外で咲かないならば。

伊勢物語によると、いま鷹狩をする交野の渚の家、その院の桜がとりわけ趣がある。その桜の木のもとに馬から下りて、桜の枝を折り、髪飾りに挿して、上、中、下の人々がみな、歌を詠んだ。馬の頭だった人が詠んだ。それは、世の中に桜がまったくなかったならば―。

〔考察〕『伊勢物語』八二段は、惟高親王が交野にある渚の院を訪れたとき、業平がそこに咲く桜を見て、「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」と詠んだ。当歌は業平の歌を踏まえながら、もし交野以外の桜がなくなつたならば、その桜のもとからいっそう立ち去り難いであろうと詠んだもの。「交野」の「交」に「難し」の「難」を掛ける。

竹間花

42折^{柏玉}しもあれ花に雨よふ鳩の声も色なき竹のおくのさひしさ

埤雅云、鶉鳩陰^{ル時ハ}則^ハ遲^ニ逐^ニ其婦^ヲ、晴^{ル時ハ}則^ハ呼^レ之^ヲ。語^ニ曰、天將^ス雨^ト鳩逐^レ婦。

〔出典〕 柏玉集、三二八番。埤雅、卷七、積鳥。

〔異同〕 『新編国歌大観』ナシ。『埤雅』「鶉鳩陰則遲逐其婦——鶉鳩灰色無繡項陰則屏逐其匹」。

〔訳〕 竹間の花

折も折、花を散らす雨が降り、妻を呼ぶ鳩の声にも華やかさがなくなり、地味な竹林の奥の寂しさよ。

埤雅によると、鶉鳩は天氣が曇ると番いの雌を追い払い、晴れるとすぐに番いの雌を呼ぶ。語によると、今にも雨が降ろうとすると、鳩は雌を追い払う。

〔考察〕 当歌は『埤雅』の記事を踏まえて、雨が降ると鳩の声も竹林の奥も、暗く寂しくなると詠む。類歌「山ふかみ雨より後に鳴く鳩の妻よぶ声ぞさらにさびしき」（『碧玉集』 鴿、一二四〇番）、「いかにせむ草の廬に山鳩のよるの雨よぶ夕暮れの声」（飛鳥井雅親『亜槐集』 山家鳥、一〇四〇番）。

〔参考〕 『埤雅』は宋の陸佃撰の字義書で、積魚・積獸・積鳥・積虫・積馬・積木・積草・積天の八篇からなる。『円機活法』二三卷、飛禽に「鳩」の項目はあるが、当歌の出典に引かれた一節は見当たらない。出典に近い文章は、『錦繡萬花谷』『山堂肆考』『御定淵鑑類函』に見出せ、いずれも同文である。また、『三玉挑事抄』の本文で、「遅」に相当する漢字は見受けられないので、「異同」に掲げた本文「屏」（しりぞく）により解釈した。

(風岡むつみ)

翫花

43 ^{柏玉}しら雲にまかへしよりやみ吉野の花にかさなる人の言の葉

古今序。春のあした、よし野のさくらは、人丸か心には、雲かとのみなんおほえける。

〔出典〕三玉和歌集類題、翫花。古今和歌集、仮名序、二四頁。

〔異同〕『三玉和歌集類題』ナシ。『古今和歌集』「よし野のさくらは―吉野の山のさくらは」。

〔訳〕花をもてあそぶ

(人麿が山桜を) 白雲に見間違えてからは、吉野の花に人々が和歌を詠み重ねたことよ。

古今和歌集、仮名序。春の朝に、吉野山の桜は人麿の心には雲かとばかり思われた。

〔考察〕仮名序は和歌の歴史を語る箇所であり、『新編全集』の頭注によると、人麿の歌に吉野の桜を詠んだものは見当たらないとする。当歌は、吉野の桜を白雲に例えた歌の多さを詠んだもの。例歌「桜花咲きにけらしなあしひきの山の峽より見ゆる白雲」(古今和歌集、卷一、春上、五九番、紀貫之)。

(風岡むつみ)

見花

44 春のうちのそをたに猶や思ひ草入ぬる磯と花に恨て

万葉集、七。寄^レ藻歌、作者未詳。塩満^{ミテハ}者人奴流^{ヌル}磯^ノ之草有^{ナレヤ}哉見^{ミラ}良久^{クダナク}少^ラ恋^コ良久^ク乃^ノ太^{フホ}寸^キ。

〔出典〕雪玉集、五三〇九番。万葉集、卷七、一三九四番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『万葉集』「奴流―流」。

〔訳〕 花を見る

（花の季節である）春の間でさえ、いつそう物思いの種になることよ。潮が満ちると隠れてしまう磯の草のように、花を見ることが少ないのを恨めしく思うと。

万葉集、巻七。藻に寄せる歌、作者未詳。潮が満ちると隠れてしまう磯の草のように、目にすることは少なく恋しさは募るばかり。

〔考察〕「異同」で示したように、「入奴流」と表記したものは、『万葉集』の古写本や江戸期の注釈書にも見られない。当歌は、花がたくさん咲く春でさえ、花への物思いは尽きないと詠んだもの。

花錦

（大八木宏枝）

45 いくめぐりひもとく花は小車のにしきたちける春をしるらん

八雲御抄云、小車錦、伊勢の御帳にまゐる紺地也云々。

〔出典〕雪玉集、五〇八番。八雲御抄、巻三、枝葉部、衣食部。

〔異同〕『新編国歌大観』『八雲御抄の研究 枝葉部 言語部』（片桐洋一編、和泉書院）ナシ。

〔訳〕 花の錦

幾たびも紐を解くようにほころび咲く花は、小車錦を裁断したかのような美しい春を知っている（から毎年、咲くの）だろう。

八雲御抄によると、小車錦は、伊勢の御帳に献上する紺地の錦である云々。

〔考察〕当歌の第四句に使われた「錦裁ち」という表現は、『古今和歌集』で「神奈備の三室の山を秋ゆけば錦たちきる心地こそすれ」（巻五、秋下、二九六番、忠岑）以来、和歌の世界では秋の歌に詠まれるのが通常である。例歌「くるるまでとどめてぞみる小車の錦たち出づる秋のはやしを」（通勝集、倚車愛楓、九三一一番）。

（大八木宏枝）

46 風たゝて日にさらす色は江にあらふにしきといふとも春の花かも

本ノマ、

左思、蜀都賦。貝錦斐成濯色江波。

白氏六帖曰、蜀成都有濯錦之江。

〔出典〕雪玉集、六〇四四番。文選、賦篇上、蜀都賦、二三四頁。白氏六帖事類集、卷第二、錦第六三。

〔異同〕『新編国歌大観』『蜀都賦』ナシ。『白氏六帖事類集』『蜀成都有濯錦之江』『蜀有濯錦江』。

〔訳〕（花の錦）

風が立たなくて日に当てた色は、江波で洗う錦といっても、春の花であるなあ。

左思の蜀都賦。華麗な貝錦という錦、色をさらすは錦江の清流。

白氏六帖によると、蜀の成都に錦をすすぐ川がある。

〔考察〕「貝錦」は錦のあやが貝の模様のように美しいもの、「斐」は各種の色が交錯してあやを成しているさま、「江波」は成都（蜀の都）の付近を流れる錦江で、この水ですすいだ糸で織った錦は蜀錦と呼ばれ天下の名品。

〔参考〕『白氏六帖』三〇巻は白居易が成語故事を類聚し、詩文作成の便宜をはかったもの。

（城阪早紀）

47 ^{柏玉}いかならん錦のとはり明くれをなへての花のきのふなりせは

白氏文集。蘭省ノ花時錦帳ノ下。

〔出典〕柏玉集、三四四番。白氏文集、卷一七、八二頁。〔異同〕『新編国歌大観』『白氏文集』ナシ。

〔訳〕（花の錦）

錦のとはりの中で毎日を過ぐす花盛りの時が、もし何もかも昨日のことになってしまったならば、どうしようか。
白氏文集。（貴公子たちは）尚書省の花盛りの時に、錦の帷帳の下で（愉快な時を過ごしている）。

〔考察〕『白氏文集』の詩の続きは「廬山雨夜草庵中」で、白楽天が廬山の雨の夜に草庵の中で寂しく過ぐす様子を描く（53番歌、参照）。「蘭省」は宮中図書館を扱う尚書省、「錦帳」は錦で作った、室の仕切りに用いる垂れ布で、宮中の華やかな様を示す。

（城阪早紀）

嶺上花

48 ^同隔来し花より出るみねの雲心なきしも色ぞわかる、

歸去来辞。雲無^{ニシテ}心^ヲ以^レ出^ル岫^ヲ。

〔出典〕柏玉集、二二六八番。文選（文章編）中、四五四頁。〔異同〕『新編国歌大観』『文選』ナシ。

〔訳〕 峰の上の花

（人から見られないように）山桜を隠してきた雲が峰から出てくると、雲の心には雑念がないといっても、色で（花か雲か）区別がつくものだ。

歸去來辭。雲は無心に峰からわきおこる。

〔考察〕陶淵明の「歸去來辭」は仕官の道をきっぱりと捨て、郷里の農村でわが心の命じるままに生きる決意を語った詩。心に雑念がない雲には、陶淵明の心象が反映されている。「岫」は山中にある洞窟で、雲は岫からわきおこる、と考えられていた。桜を白雲に例えることは43番歌、参照。当歌は山桜に白雲がかかっているときは区別できないが、白雲が山から離れると見分けられると詠む。

（城阪早紀）

花

49 見る人よ花に立ならふ太山木もあれは有とや袖かはすらん^同

〔出典〕柏玉集、二七九番。〔異同〕『新編国歌大観』「袖かはすらん―袖をかすらん」。

〔訳〕 花

見る人よ、桜に匹敵する深山の木もあるとするならば、袖が触れるほど近くに並んでいるのだろうか。

〔考察〕「太山木」は、50番歌に引く「紅葉賀巻の詞」参照。桜のような光源氏と山奥の木のような頭中将が並んで舞うことを踏まえて、当歌は奥山には桜と木が並んでいるだろうと詠んだもの。

（植田彩郁）

花満山

50 山は今みながら花のかたはらに立ならふへきときは木もなし

紅葉賀巻の詞、まへにしるし侍り。

うつほ物語第九云、花のかたはらのときは木のやうに見え給ふ云々。

〔出典〕雪玉集、四四七番。源氏物語、紅葉賀卷、三二一頁。うつほ物語、蔵開上、四〇一頁。

〔異同〕『新編国歌大観』『うつほ物語』ナシ。

〔訳〕花が山に満ちている

山は今、すべて花盛りで、桜の傍らに立ち並ぶと見劣りするような常緑樹も見えないことよ。

紅葉賀卷の詞。前に記してあります。（35番歌、参照）

うつほ物語の第九によると、花の傍らの常緑樹のように見劣りがなさる云々。

〔考察〕「紅葉賀卷の詞」とは、35番歌で挙げられた『源氏物語』の「立ちならひては、花のかたはらの太山木なり。」を指す。『うつほ物語』の「花のかたはらのときは木」とは、優れたもののそばにあって見劣りするものかたとえ。

（植田彩郁）

野花

51よき人の吉野といふは世にしらぬ花さく春の名にこそ有けれ

万葉集、一。幸吉野ノ宮三時御歌、天皇御製

淑人乃良跡吉見而好常言師芳野吉見欲良人四来三

〔出典〕雪玉集、四六二番。万葉集、卷一、二七番。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『万葉集』「幸吉野宮時御歌天皇御製―天皇幸于吉野宮時御製歌」「吉見欲―吉見与」。

〔訳〕 野の花

昔のよき人が吉野をよい所だと言ったのは、世に知られていない桜が咲くという春の名声にあったのだなあ。

万葉集、卷一。天皇が吉野離宮に行幸された時のお歌、天皇御製。

昔の良き人が、よい所だとよく見て、よいと言った。この吉野をよく見よ。今の良き人よ、よく見るがよい。

〔考察〕『万葉集』の「淑人」は「昔の君子」を、「良人」は「今の世の君子」を指す。当歌は「吉野」に「良し」を掛け、吉野がよい所だと言われたのは珍しい桜が咲いているからだと言む。

（植田彩郁）

百首歌中春

52花にあかぬ歎きこるてふ斧のえはこゝにくちなん山さくらかな

述異記曰、晋ノ王質伐^レ木^ヲ至^ニ信安郡石室山^一。見^ニ数童子^一圍^レ碁、与^フ質^ニ一ノ物^ヲ。如^ニ棗核^一。含^レ之^ヲ不^レ飢、局未^レ終、斧^ノ柯爛^尽。既^ニ帰^レ無^ニ復時ノ人^一。

〔出典〕雪玉集、七一八一番。述異記（和刻本漢籍隨筆集13）上、一三丁表。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。「述異記」「晋王質伐木至信安郡石室山―信安郡有石室山晋時王質伐木至」「見数童子圍碁与質一物―質含之不覺饑俄頃童子謂曰何不去質起視」。

〔訳〕 百首歌のうち、春

美しい花に飽きることがなく、歎きのため息をつき、それが凝り固まるではないが、投げ木（たきぎ）を伐る斧の

柄が、きつとここで朽ちてしまうほど美しい山桜だなあ。

述異記によると、晋の王質は木を伐つて、信安郡石室山に着いた。質は数人の童子が碁を囲んでいるのを見て、いと、子供が質にあるものを与えた。それは棗の種のようなものであった。これを口に含むと空腹になることもなく、碁の勝負がつく前にふと気づくと、斧の柄が腐っていた。山から帰ると、知っている人は誰もいなかった。

〔考察〕当歌は「なげきこる」に「歎き凝る」と「投げ木樵る」を掛ける。典拠の「爛柯」（爛は腐る、「柯」は斧の柄）を踏まえた和歌は、すでに『古今和歌集』にも「古里は見しごとあらず斧の柄の朽ちしところぞ恋しかりける」（卷一八・雑下・九九一・友則）とある。当歌もその故事を踏まえて、斧の柄が朽ちてしまうほど見とれる山桜の美しさを詠んだもの。

〔参考〕童子たちが碁ではなく琴を弾いていたという異伝がある。例『浜松中納言物語』（卷五、四四三頁）。

（吉岡真由美）

草菴花

53ふりはつる草の庵の雨にしもわすれんけふの花の時かは

白氏文集。蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中。

〔出典〕雪玉集、四八〇番。白氏文集、卷一七、八二頁。〔異同〕『新編国歌大観』『白氏文集』ナシ。

〔訳〕 草庵の花

すっかり古くなってしまった草庵に降りしきる雨の中でも、今日の花盛りの時を忘れることがあろうか。

白氏文集。貴公子たちは尚書省の花の盛りの時に、錦の帷帳の下で愉快な時を過ごしているが、私は廬山の雨の夜に草堂の中で寂しく過ごしている。

〔考察〕出典の漢詩は、白楽天が廬山の草堂で夜雨の音を聴きながら独り宿った際に、長安にいる友人たちに寄せたもの（47番歌、参照）。当歌はそれを踏まえて、零落しても忘れることがない花の美しさを詠む。初句の「ふり」に「古り」と「降り」を掛ける。

（吉岡真由美）

花落衣薰

54 二葉より匂ふ林にいる袖もかくやは花のちるをつゝまむ

観仏三昧経一云、如下伊蘭林ノ方四十由旬ナラン、有テ一科ノ牛頭梅檀一、雖有ニ根芽一、猶未タ出レ土。其伊蘭林唯臭^{クシテ}無^レ香^{シキコト}。若シ有^レハ^ク嗽^クニ其ノ花菓一ヲ、発^{シテ}レ^ハ狂^ヲ而死^ス。後ノ時梅檀ノ根芽漸々ニ生長^{シテ}纔^ニ欲^{レス}成^{レント}樹。香氣昌盛^{ニシテ}遂^ニ能^ク改^メ変^{シテ}此林一ヲ、晋皆香美^{ニシテ}衆生見者皆生^ニ希有^ノ心云云。

〔出典〕雪玉集、五三九番。安樂集、上。

〔異同〕『新編国歌大観』『花落衣薰』『花落薰衣』。『安樂集』（貞享版本）「雖有根芽―雖有根牙」「梅檀根芽―梅檀根牙」。

〔訳〕花が落ちて衣が薰る

二葉のときから香気が漂う林に入ると、このように散っていく花を私の袖でも包めるだろうか。

観仏三昧経によると、伊蘭の林が四十由旬広がる中に一本の牛頭梅檀があった。根と芽はあるが、まだ地面か

ら芽を出していないとき、その伊蘭の林は悪臭を放ち、よい香りなどしなかった。万が一その花や果実を口にすることがあれば、気が狂って死んでしまう程であった。しばらくして梅檀の根や芽がやっと成長して、まだ弱々しくはあるが小さな樹になった。芳香は広く漂い、最終的にこの林をすべて美しく香しいものへと変えてしまった。これを見た人々はみな、めったにない素晴らしいことだという思いを起こすようなものだ云々。

〔考察〕伊蘭は煩惱を、梅檀は念仏の心を意味し、香りの良い梅檀の木は、悪臭を放つ伊蘭の林に混じっても芳香を失わず、最終的には林そのものを変えてしまうという例えをもって、どんな人でも功德をつめば、煩惱・諸悪を断絶させることができると説く。当歌はそれを踏まえ、花が散ることを惜しみ、その香だけでも衣に残したいと詠む。

〔参考〕『安樂集』は唐の道綽^{どうしやく}著、浄土真宗で重んじられた。『観仏三昧経』は東晋の仏駄跋陀^{ぶつだはつだ}羅訳。

（吉岡真由美）

寄花神祇

55 葛のはの恨の秋に立かへり神のいかきも花そうつろふ

古今集云、神の社のあたりをまかりける時に、いかきのうちの紅葉を見てよめる、貫之。

千早振神のいかきにはふ葛も秋にはあへすうつろひにけり

〔出典〕雪玉集、五四三番。古今和歌集、卷五、秋下、二六二番。〔異同〕『新編国歌大観』『古今和歌集』ナシ。

〔訳〕 花に寄せる神祇

葛の葉の色でさえ変わってしまう恨めしい秋に戻ったかのように、神社の玉垣にも桜が散ることだ。

古今和歌集によると、神社の近所を通った時に、玉垣の中の紅葉した葛を詠んだ歌、紀貫之。

神社の玉垣に絡まる葛は神様のご威光でいつも青々としていそうなものだが、それさえやはり秋の力にはかなわないで、色が変わったのだなあ。

〔考察〕 葛の葉は風に翻って見せる白い裏葉が印象的なことから、裏見草とも呼ばれ、「恨み」との掛詞として用いられることが多い。当歌は、境内の葛の葉でさえ秋になると紅葉するのだから、桜が散るのも仕方ないと詠んだものの。

（風岡むつみ）

春月

56 太山木のあらしや花のかたはらに月をなさしと雲はらふらん

紅葉の賀の巻の詞、前に見えたり。

〔出典〕 雪玉集、七三八五番。〔異同〕 『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 春の月

山奥から吹き下ろす風は、桜の傍らに月を置かないように雲を押し流して（月を隠そうとして）いるのだろうか。

紅葉賀巻の文章は、前述した。（35・50番歌、参照）

〔考察〕 『源氏物語』紅葉賀の巻では、光源氏と青海波を舞う頭中将を「花の傍らの深山木」にたとえる。当歌はそれを踏まえて、深山木は桜のそばを独占したいため、桜に近づく月を雲で隠そうとして、奥山から嵐を吹かせるのだろうか」と詠む。

（風岡むつみ）

春暁月

57 雲にあふ影をおもへは春のよのあかつき月はかすまざりけり
柏玉

古今集序いはく、秋の月をみるに、暁の雲にあへるかことし。

〔出典〕 柏玉集、一三三番。古今和歌集序、二七頁。〔異同〕『新編国歌大観』『古今和歌集』ナシ。

〔訳〕 春の暁の月

雲におおわれる秋の月を思えば、春夜の暁の月は霞むことがないなあ。

古今和歌集の序によると、秋の月を見ているうちに、暁の雲におおわれたようなものだ。

〔考察〕『古今和歌集』序の一節は、宇治山の喜撰法師の「言葉かすかにして、始め終わりたしかならず」（言葉が控えめであつて、歌の道筋が確かではない）という歌風を例えたもの。

（城阪早紀）

旅宿春月

58 むすふへき夢もはかなし秋のよとたのまぬ月の春のまくらは

いせ物語云、おほみきたまひ、ろくたまはむとて、つかはさ、りけり。此むまのかみ、心もとなかりて、「枕として草引むすふこともせし秋の夜とたにたのまれなく」と、よみける。時は、やよひのつこもりなりけり。

〔出典〕 雪玉集 三〇三番。伊勢物語、八三段。〔異同〕『新編国歌大観』『夢―草』。『伊勢物語』ナシ。

〔訳〕 旅宿の春月

見られる夢も、はかないものだなあ。秋の長夜のように頼みにできない三月の、春の眠りでは。

伊勢物語によると、御酒を下され、ご褒美を下さろうとの思し召しで、お放しなさらなかった。この馬の頭はお許しが待ちどおしく心せいで、「今夜はおそばにいて、枕として草を引き寄せて結ぶ旅の仮寝もいたしますまい。短夜の春ですから、秋のようにせめて夜長を頼みにして、ゆつくりすることさえできません。すぐに夜が明けてしまいますので」と詠んだ。時節は三月の末であった。

〔考察〕『伊勢物語』八三段は、惟喬親王のお供として馬の頭だった翁が鷹狩りに行き、幾日か経って親王が都の邸宅に戻られたので、馬の頭は早く帰ろうとしたが引き留められる場面である。「三月の末」は、四季のうち最も夜が短い夏に接している。

（城阪早紀）

